

緒言

河野博隆

Hiroataka KAWANO

帝京大学医学部整形外科学
講座

森岡秀夫

Hideo MORIOKA

国立病院機構東京医療セン
ター整形外科

令和という新時代を迎えたわが国は、大きな変化の波にもまれています。医療界も少子高齢化による社会保障制度の変革に加え、疾病構造の変化への対応を求められています。

がん罹患数の増加と診療技術の向上による生命予後の延長によって、がんと共存するがん患者が激増し、がん診療には特に国民的関心が向けられています。そして、がん診療の世界では生命予後のみならず QOL を重視するパラダイムシフトが生じています。しかし、整形外科は議論の蚊帳の外に自ら身を置いてしまっているように感じます。

運動器診療科である整形外科は、2007 年からロコモティブシンドロームという概念を通じて、国民の健康の増進、社会負担の軽減に寄与してきました。しかし、がんの領域は手つかずの未開の地(フロンティア)であり、まだまだ大きな貢献ができる余地が残されています。運動機能の低下は疾病のない高齢者でも大きな問題となりますが、がん患者では運命を分ける問題となります。この点に着目したのが「がんロコモ」です。

整形外科に求められているのは、がん自体を治すことではありません。整形外科医であれば、だれもががん診療の一員として参加し、専門分野を活かしてがん患者を「動ける」ようにすることによって、がん診療の形が大きく変化し、「整形外科の関与がなければ適切ながん診療はなしえない」と認識される可能性もあると期待しています。そのためには、エビデンスの確立が課題となります。

本シンポジウムでは、整形外科医全体に向けて、がん診療に携わる整形外科医のみならず他の診療科の先生方に、がん診療における運動器診療の意義と可能性について執筆いただきました。本企画が、がん患者が「動ける」ことの意義を考える機会となり、整形外科には、がんの診断時から人生の最期まで、生活・就労・そしてがん治療自体をも一変させる潜在能力があることを知っていただく機会となることを願っています。